

総司はひとり

—血風・新選組—

戸部新十郎

青樹社

誠



著者無検印承認

0093—116401—3828

総司はひとり — 血風・新選組 —

著作者 || 戸部新十郎

発行者 || 土井 勇

発行所 || 株式会社 青樹社

東京都千代田区三崎町二一六―七 郵便番号一〇一

電話東京二六一―九七六六・二六三―七二六七 振替東京四七六四八

印刷所 || 有限会社 八光印刷

製本所 || 土開製本株式会社

落丁・乱丁本はお取り替え致します

◆定価・発行日はカバーに表示してあります

総司はひとり

―血風・新選組―

装幀

玉井ヒロテル

陣街道

沖田総司は陣街道に出た。

陣街道は鎌倉街道の一部の俗称であつて、武州府中から関戸に至る。むかし、鎌倉から東国、北国へ軍勢をもよおすさいの往還であつたという。

が、多摩育ちの総司にとっては、幼なじみのただの道であつた。色も、匂いも、ただずまいも、すべてなじみ深い。

その陣街道を、総司が行く。

肩には竹刀袋。先に武具と稽古着がゆわえてある。

早春の日が暮れようとしていた。ときおり、突風が砂埃を捲き上げる。

馬糞風——そのたびに、総司の黒っぽい小倉の

袴が、片えに吹き寄せられてふくらむ。髪がよもぎになつて乱れ、瘦身が、いまにもたわむかと思われる。

これとても、総司には慣れつこになつていた。砂埃が唇を白くしても平氣であつた。

肩をぐいと張つて、になつてゐる竹刀袋を、ひとゆすりする。

けれども、僅かに不快感がないでもなかつた。

総司の表現によれば、

「また、胸騒ぎがきた……」

ということになる。

その胸騒ぎは、若者にありがちな、漠とした春の思いというものかもしれない。

突風はたぶん、春一番などというものであつて、まだうすら寒いが、じつは春の氣がすでに若者の肌に忍び寄つてゐるのであらう。それなら、ときめきといつていい。

ところが、ここ一兩年、そんなときめきのあと、

熱っぽくなったり、だるくなったりする。胸の臓腑の中に、虫が這いずり回る痛痒かもしれない。総司には、まだよくわかっていない。

ただし、かれはごく単純に、文字通りの胸騒ぎとして捉えている。

つまり、なにかが起ころうという予感である。

——胸騒ぎがきた……

総司はあいている手の指を、胸に当てがった。どうなるわけでもないが、そうすることが癖になっている。

突然、眼前を黒い毛物がよぎった。

——猫か……

消えた繁みに視線を走らすと、そこに凝然と立つ影があった。編笠をかむった浪人者である。横をむいたままそよとも動かない。

いま失せた黒い猫が、そのまま化したかときえ思われる。

迂濶——と思った。

けれども、そいつはすでに繁みの中の単なる物体になり切っている。総司の剣気をもって図るには、あまりに異質なただずまいであった。

「ものを訊ねる」

そいつは身動きもせず、声をかけた。

「ここが天王の森であろうか」

陰鬱な声音である。が、その言葉の端しほしに、北国のなまりが窺えた。

「笠を」

総司はにやりと笑った。

「お取りになったらいかがですか」

そいつはたぶん、総司がいんぎんな口調になったときの心内の憤懣を知るまい。

浪人者は、僅かに体を総司の方に向けていった。

「仔細がある」

体を向けることによって、いくぶん礼を果たしたつもりかもしれない。

けれども、仔細がある、というだけでは、少しも笠を取れぬ理由にはなっていない。かえて無礼というものであろう。

そいつはしかし、総司の心を付度もたすることなく、じつと返事を待っているようなのである。

「天王の森はここです」

総司は進んで答えた。

こんなとき、総司は憤りをむしろつきつめてみる傾向がある。忍従ではないし、我慢というのではない。

かれはもともと、短気者とされていた。が、短気を起こすということ、起こしたあとの配慮ということは、おのずから別物であろう。

意地悪く憤りを燃やしつつ、そのもつとも効果ある爆発の機会を狙っているようだ。

それゆえ、ときには、

——短気の気長者

といわれることがある。

もつとも、願われたかたちでは、気長者というほかない。

「それならよいのだが」

浪人者はつぶやいて、すぐに改めて訊ねた。

「そなた、ここへくるまでの間、女連れの武士に会わなかったか。そう、三、四人もいるか」

「会いませんよ」

「それならよいのだ」

浪人者は憮然としていった。

総司が気長者なら、浪人者は横柄者であろう。

「もう、いいのですか」

総司はほんの少し、半身を開いた。になっている竹刀袋をいつでも投げ出し、すかさず抜刀できる構えをとっている。

浪人者は笠の内から、じつと総司の構えを見守っているふうであった。が、だからといって、とくに要慎をする気ぶりもなかった。

「そなた、修行中か」

「まあ」

「いくぶん、できそうだ。このあたりに師匠がいるのか」

「いますよ」

受け応えしながら、総司は徐々におかしさを感じはじめていた。はぐらかされるような滑稽感である。

浪人者は総司の武具をかついだ姿から、修行中と見たのに相違ない。

むろん、剣の道はどこまでも修行中であろう。が、かついでいる武具は、稽古を受けるためではなく、授けるためのものである。

江戸の近藤道場では、多摩に散在する門弟達に、こうやって出稽古に歩く。当主の近藤勇も、師範代の土方歳三も、みな道具をかついで歩き回っている……

いま、このあたりの師匠、ということになれば、ほかならぬ総司ということになる。

「なんという流儀だ」

「天然理心流」

「聞かぬ名だ」

「もう、いいですね」

総司はにっこり笑った。両の爪先に力が入った。そのはなを、

「きたな」

浪人者はふと首を延ばしてつぶやいた。

街道の向こうから、三つ四つの人影が近づいてくるのが見えた。

なるほど、女が一人、混っている。年かさらに男が前を小走りに駆け、二人の男が女をうしろから押し出すようにしている。それは、女の駆けろのを援けているのではなく、無理じいに連れてこようとしている気ぶりであった。

——胸騒ぎが当たった

総司はいったん、こめた力を体から抜いた。そして、これから起こるなにかを、見聞することにな

した。その方が、この無礼で横柄な浪人を斬るよりおもしろそうだ……

浪人者は人影の近づくのを眺めながら、

「たしなみのない……」

といった。

だれにいったものか、わからない。浪人者はすでに、総司を黙殺してしまっている。そんな氣ぶりの佇立であつた。

人影はしだいに歩度を速めたようだ。先頭の男が、なにか叫んだ。言葉はわからないが、叱咤の意であろう。

「走らんでもいいのだ。たしなみのない……」

浪人者はまた、つぶやいた。

それから急に総司を見返った。

「もう行くがいい」

「行きませんよ。おもしろそうだ」

「おもしろいことがあるものか」

浪人者は人影が森蔭の暗いところに消えた一瞬

を捉えるようにしていった。

「おれが斬られるだけさ」

「やはり」

総司は嬉しそうに、そして、木立の間まで退がりながらいった。

「胸騒ぎが当つた……」

もう先頭の男がま近に迫っていた。顔色が紙のように白い。眼だけが光って、浪人者を睨んでいる。

——おのれ！

たぶん、このように叫んだようである。が、ほとんど声にならなかった。単に喉がぜいぜい鳴つたに止どまった。そのまに、女を含んだ一団が追いついた。

いずれも、息を切らしている。駆けたというだけでなく、ある激しい興奮のせいであろう。

それらが、女を中に据え、並んで浪人者と向き合つた。しばらく声もなく大息をついているの

は、いくぶん笑止であつた。

年かさの男は、どこぞの藩の上士のように、二人の男はその家士と見受けられる。

けれども、女は何者であろう。

年は二十を五つ六つ、すぎているだろう。眉は落としている。不安げな黒い瞳を、ひとと浪人者に向け、唇は半ば開いたままである。それがむしろ妖しく、美しい。

——ここいらで見たことのない女だ……
総司は思った。

息をようやく整えたらしい年かさの男が、今度ははつきりと叫んだ。

「おのれ！ 笠を取れ」

その叫び声につれて、浪人者はゆるゆると笠を取った。蒼黒い顔が出た。以前はたぶん、端正であつたろうと思わせる横顔である。

少なくとも、笠の内から総司に話しかけていた声音とは似つかわしくはない。

とたん、

「あ！」

女の口からかすかな嘆声が出た。

「仙左衛門でござる。かたきの神保仙左衛門でござるよ」

浪人者はこういつて、頬を歪めた。女の嘆声に対し、笑顔を見せようとしたようである。

神保仙左衛門と名乗る浪人者と、女との視線が合った。けれども、仙左衛門はすぐに視線をそらしたし、女は臉を伏せた。

一瞬だが、ある感情が通い合ったのを総司は、見た。

少なくとも、「かたき」という言葉が含む憎しみの色がなかった。憎しみを明らかに見せたのは、他の連中である。

「かたきを討つのだ。これ、しかと討つのだ」
年かさの武士が、女の手にも自らの脇添を抜いて持たせた。

その手付はいくぶん乱暴であった。この場で、仙左衛門とある感情を通わせたことにいらだっているようである。

それから武士は素早くたすきをかけた。二人の若い家士達も、見習うようにしてたすきをかけた。そして、抜刀した。家士達は早くも興奮して、刀身をぎごちなく構えた。

——噂に聞く敵討というものがはじまるようだ……

と、総司は木立の間から、乗り出すようにして見守った。

「さ、抜けい」

武士が叫んだ。

が、仙左衛門はつくねんと立っていた。

「早く抜けい」

武士が声を励ました。じっさい、あたりに夕闇が迫っている。

「はて？」

仙左衛門は小首を傾げた。

「討手が見当らぬようでござるな」

「討手は、これ、この者じゃ」

武士が女の方に顎をしゃくって見せた。

「それはおかしい。討手は弟御でござろう。手前は弟御に討たれるつもりでいた」

「名義人がだれであれ、うぬはわれらのかたきだ」

「仕方がござらん」

仙左衛門はゆるゆると抜刀した。剣尖がゆっくり回って、ほとんど地べたに触れるかのように、だらりと下がった。

もしいえるなら、それは討たれるための構えであらう。

が、刀を抜いたということで、家士達は一段と緊張した。腰を引き、刀身だけが前に延びている。へっぴり腰というやつである。すでに呼吸も乱れている。

年かきの武士も半歩、退った。こちらはまだまっとうの構えをとっているものの、やはり緊張の鼓動が刀身に伝わってふるえていた。

仙左衛門というかたきは、明らかに討たれようとしている。打ち込めば、なんの造作もなく、斬ることができるに違いない。

だから、緊張は斬り合いに対するものではなく、人を斬ることへの恐怖と焦燥であろう。

人を斬ること。

総司はいま、おのれが仙左衛門を斬る立場を考えてみた。

まったく無防備の仙左衛門。それでも、じりじりと焦燥が心内に湧き上ってくる……

ただ一人、女だけに緊張感はなかった。脇添を異物でも握るかのようにして、立ちつくしている。

討つ意識のない姿、とでもいえようか。

「かかれ」

武士がわめいた。自らを奮い立たせようとする

叫び声であった。

声につられて、家士の一人がとっと走り出した。

延び切った両の腕が硬直してしまっている。なにか、からくり仕掛けの土偶人形が動き出したようなあんばいである。

その切先が、身動き一つせぬ仙左衛門の小びんをかすめた。

一滴、二滴、血が散った。

仙左衛門は苦笑したようである。が、総司はその不敵な笑みを、充分に見極めめることができなかった。なぜなら、刀身を突き出したままの土偶人形が、そのまま駆け抜けてきて、総司の眼前へ迫っていたからである。

「うわあ！」

そいつは鼻先で、突然わめいた。

眼は吊り上がっていたし、口は大きく開いていた。その口の奥から、その人間の本性ともいふべ

き息吹が、なまぐさい臭氣をともなって発散された。

せつな――

総司は腰をひねった。

生ま温かいものが、総司の顔面を斜にたたいてよぎった。

そいつは、なおも数歩駈けて行って、ふと二つに折れて崩れ落ちた。

総司はおのれでも、いつ抜き、どう斬ったかわからぬ刃を、だらりと下げていた。なにか、体の中を冷ややかな風が吹き抜けた思いである。

なぜ刃を揮ったのか、よくわからない。そいつが、総司の鼻先へ切先を突きつけてきたからではない。よけようと思えば、いくらでもよけることのできる土偶人形の切先なのだから……

しいていえば、そいつの恐怖におののく形相と、生ま身の息吹というものであらう。

不快があった。総司の心底にひそむなにかが、

反射的に反撥させたようである。

後日、総司のこのような反射的な働きはより鋭く、断末魔の様相をいやというほど見ることになる――

が、総司にとって、そのときははじめての人斬りである。

刀が動けば、人を斬る。

この当然なことが、生ま温かい血潮を浴びることによって、実感となった。

気がつくとき、あたりはふつとり、静寂を保っていた。討手の連中も、仙左衛門も、そして女も、一様に総司を見つめている。

一同には、何事が起こったのか、とっさに判別できないでいるらしかった。

「困ったことをしてくれた」

やがて、仙左衛門がぼそりといった。にわかに、かれの討たれの構えが変わった。だらりと下げていた刃が、徐々に引き上げられた。

ひたと逆八相に構えると、討手の方に向かっていった。

「やむない仕儀になった。お相手仕る」

「うぬ！」

武士と家士は狼狽した。

なにかいいかけようとするところを、仙左衛門はずぶりと踏み込んで、横薙ぎに一刀。

返す刀が、硬直したままの家士へ。

不幸というほかない死体が二つ、夕暮の木立の中に転がった。

「去れ」

仙左衛門が総司にいった。

その声があいかわらず陰鬱なので、いっそ凄味があった。

総司はまだ立ちつくしていた。おのれを含めたいまの状況を、じっくり反芻はんすうしているかのようであった。仙左衛門はしかし、ふたたび総司の方を振り向こうとしなかった。女の方へ歩み寄ってい

た。

総司は仙左衛門が膝から崩れ落ちるようにしゃがみ込んでいる女の傍で、なにやらささやいているのを見た。

それは討手と仇人との間柄ではなかった。ひそんだ想われ人同士のささやきに似ていた。

総司はそっと、道具をゆわえた竹刀袋を肩にかついだ。天王の森を出る。陣街道はもう夕闇に包まれていた。

関戸へ入る前に、総司は多摩川の流れて血糊を洗った。ことさらに冷たい水が、いっそ心地よかった。

関戸の道場には、日野宿から回った近藤勇がとくに到着していた。道場は武芸というより、天然理心流を愛好する豪農の家である。その納屋か庭先が、道場となる。

近藤勇は集まってきた近在の門弟達を相手に、愛想よく話し合っていた。この男の場合、しゃべ